

## 子育て支援力育成のための提案-メンタリングシステムの導入と可能性について

指導教員 北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科 講師 福井逸子

参加学生 伊藤暦・廣瀬美侑・石田好・坂田遙香・廣見友里乃・百津聡美・三田麻衣子・山本大輝  
木戸脇ゆり

### 1. 調査研究成果報告

本研究では、学生自らが、子育て支援についての学びを深めるために、地域内（金沢市内）に開かれた子育て支援広場に参入し、そこで中心的な役割を担っている担当者（メンター）からの助言や観察を基にした事例の分析を行った。その結果、保育の実践や発達の理解を深める等メンターからの学びが多様なものであることが実証された。また、メンター自身も学生側から、少なからず影響を受けたことが本研究を通して明らかになった。

### 2. 調査研究の目的

核家族や地域社会の弱体化など、子育てを巡る社会環境の変化に伴い、子育て支援の重要性はますます高まり、子育て支援が社会全体で改めて見直されている時期にある。現在、地域のあらゆる場所において様々な形態で子育て支援は展開されているが、そのニーズは留まることはない。そのため、幼稚園教諭・保育士養成校においても、学生の「子育て支援力」養成のために様々な取り組みを行っている。

本研究では、地域の子育て支援の場と養成校が協働して、学生がそのような場に入り、子育て支援担当の保育者（メンター）によるメンタリングを受けることを通して、「子育て支援力」を養成するようなシステムが導入できないかを提案することを目的としている。メンタリングとは、豊かな経験を持つ専門家（メンター＝ここでは子育て支援担当の保育者）が、学び手（メンティー＝ここでは学生）に助言を与え自立を見守り援助・指導していくことを意味するが、その過程でも学生も子育て支援担当の保育者が相互に学び合う関係が作られることが期待できる。

メンターやメンタリングの研究は、かつてアメリカを中心に実践されてきたが、日本の保育現場、とりわけ子育て支援の現場においては、実践例がない状況である。本研究を通して、将来、保護者支援および地域子育て支援を担っていく学生たちが、子育て支援に関わる援助技術を学び、習得していくためには、メンターの存在は不可欠であり、メンタリングシステムは有効であると考えられる。

石川県では、マイ保育園制度、プレミアムパスポートの導入など子育て支援政策を全国に先駆けて行っている実績があるほか、地域内には、多くの子育て支援広場が開設されている。そこには主任保育士と呼ばれるメンターも多数配置されており、このような地域内の人的資源を学生の学びに活用していくことは、「次世代育成」という観点からも、大いに期待できるテーマであるといえるだろう。

### 3. 調査研究の内容

（調査の骨子）

本研究は、学生自身が、地域内（金沢市内）5箇所の子育て支援広場に出向き、参与観察及び担当保育士（メンター）からのカンファレンスを通して、集積した事例記録（データ）を基に、考察と協議を重ね進めていった。さらに、学生（メンティー）から子育て支援の担当保育者（メンター）へのインタビューを行い、学生（メンティー）が子育て支援に参加することによって、担当保育者（メンター）にも何らかの効果が期待できるのかについて検証を試みた。

➤ 調査方法

- (1) 事例研究（参与観察・記録・カンファレンスを基にして）
- (2) メンティー（学生）からメンター（子育て支援担当保育士）へのインタビュー

➤ 調査期間

2011年6月～2012年（平成24年）1月（各自広場の開催期間・開催日に応じて）

➤ 調査地（金沢市）

- (a) H大学地域子育て開発センター『ウィン・プレイ・ルーム』
- (b) H保育園自園型子育て支援広場『ぽけっと』
- (c) 子育てサロン『ピヨピヨくらぶ H』
- (d) S保育所子育て支援センター
- (e) I幼稚舎『ぴーちゃんのおうち』

➤ 対象者

以下の子育て支援担当者及び各広場に集う親子

- (a) 『ウィン・プレイ・ルーム』主催者代表 M氏
- (b) H保育園子育て担当 I保育士
- (c) 子育てサロン『ピヨピヨくらぶ』責任者 S氏
- (d) S保育所子育て支援センター担当 D保育士・T保育士
- (e) I幼稚舎子育て支援担当 A保育士

【注】上記の各子育て支援広場においては、本研究の趣旨を説明した上で、事例データでは、個人（特に参加している親子）が特定されないように、イニシャル等を違い配慮する事を誓約した上で、調査・研究を進めた。

#### 4. 研究の成果

- (1) 学生が子育て支援広場において参与観察を行い、子育て支援担当者（メンター）からの助言を通して、学んだ事を取りまとめて分析した結果、以下の5つの柱（視点）が抽出された。

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>① 保育の実践力の質的向上</li> <li>② 子どもの発育発達に関する知識や技術の深化</li> <li>③ 子どもと親の両者を視野に入れた環境構成と遊びの展開方法</li> <li>④ 保護者との信頼関係を築くカウンセリングマインド</li> <li>⑤ 地域資源との連携の必要性</li> </ol> |
|---|

次に、上記の各項目における実際の事例をいくつか紹介していきたい。

◆ 《保育の実践力の質的向上》事例1 『絵本の読み聞かせ』（学生のK記録）

私は子育て支援ルームで絵本の読み聞かせの実践をさせていただく機会を頂いた。乳児向けの絵本を準備して、手遊びをしてから絵本を読み聞かせ始めたが、想像以上に子ども達は絵本に集中してくれなかった。少し焦りを感じたが、保護者の方々は私の絵本にじっと耳を傾けたり、子どもに向かって「次は何が出てくるかな？」等、絵本に興味を持つように言葉がけをしてくれた。

【考察1】

この事例から、乳児が一斉に絵本に集中することは発達段階としては難しいことを学んだ。また、子育て支援担当者とのカンファレンスでは、絵本の読み聞かせは、保護者を中心に行い、その後家庭で、親子が1対1の空間の中で、絵本を通して親子を繋ぐきっかけになれば良いということ学んだ。

◆《子どもの発達に関する知識や技術の深化》事例2『ハイハイの練習』（学生Iの記録より）

支援ルームでG太をうつ伏せに寝かせながら、G太の母親と保育者が「がんばれ！」と声かけをしている。G太はうつ伏せにされるのを嫌がっている様子で、泣きながら顔を上げている。

母親は、G太の目の前でおもちゃを振りながら、「本当は座って遊びたいんだよね。でも、もうちょっと頑張れ。」とG太の気持ちを読み取りながらも、うつ伏せの姿勢を変えない。

保育者は、「こうやって、うつ伏せにしているのは、ハイハイをたくさんして欲しいからなの。手足の筋力をしっかり鍛えないと、歩くようになった時に、転びやすくなって、後から大変だからね。お母さんとGくんは、一緒に頑張っているんだからね。」と声をかける。

【考察2】

この事例は、子どもの運動面の発達段階の理解を考慮して、適切にアドバイスをしている事例である。最近では、1歳を迎える前に歩き始める子どもが統計的に増加傾向にあるようだが、それに伴い、転びやすい子どもや、足腰の筋力の弱い子どもが増加している等の問題点が指摘されている。このような問題を緩和するためにも、歩行を始める前のハイハイは、運動の発達の側面において重要な課題である。

この場面は、保育者が子どもの発達方向性を母親に示しているが、保護者にとっても「ハイハイがしっかり出来れば、次はしっかり歩けるようになる。」という発達の見通しを持つことができ、育児の中の励みになると感じた。

◆《子どもと親の両者を視野に入れた環境構成と遊びの展開》

事例3『きのこのシール貼り』（学生Hの記録より）

ホールの中心にテーブルが配置されていて、その上にきのこが描かれた白い画用紙と、赤・青・黄の丸いシール（直径1センチ程）が用意されている。参加した親子は皆、テーブルの周りに座り、子どもと一緒にシールを貼る作業を始めた。初めは興味を持たなかったA朗も、母親が「シールペタン楽しいな。A朗もやってみようか。」などと言葉がけをしながらシールを貼っている様子を見ると、真似をしたがり、自らシールを貼るようになった。それを見ていた担当保育士は、親子の様子を見守っていた。そして、シール貼りへの集中力が切れた様子のA朗に、「A朗くん、次はきのこさんに模様を描いてみようか。」と言葉がけをし、次の遊びへとつなげた。

【考察3】

この後、保育士は母親に、今の時期は手先の器用さが発達すること、それを促すためにシール貼りなどの遊びが役立つことなどが伝えられた。その話を聞き、母親は、より一層A朗への言葉がけをおこなう様子が見られた。この『きのこのシール貼り』の活動には、保護者への子どもの発達発達に対する理解の促しや、親子のコミュニケーションのきっかけとしての役割が見られる。また、この活動は、家に帰って家庭でも行うことができ、子育て支援センターだけでなく、その後の親子のコミュニケーションを促すものであると考える。

## ◆《保護者との信頼関係を築くカウンセリングマインド》

## 事例4『初めての子育て支援』（学生 M の記録）

『わくわく園解放』では来た親子から、順番に受付で名前を書き、名札を受け取り子どもの服に名札をつけることになっている。この日、初めて参加する E 親子は、不安そうな顔で受付に来る。保育士は、「はじめまして。保育士の D です。お名前なんとおっしゃるのですか？」と話し掛ける。母親は、「はじめまして E です。友達に紹介されて来たんです。」と答える。保育士は、「そうなんですか。今日は楽しんで行ってくださいね。何かあったらいつでも聞いてください。」と言葉を掛けながら E 親子を保育室に案内する。

『わくわく園開放』が始まり、C 親子が少しずつ遊びに参加し始めてきた。そこで、保育士は、E 親に「少し慣れてきました？いろいろな親子がいるでしょ。」と話し掛けると、母親は「はい。色々なものがあってどれで遊ぼうか迷います。」と言葉を返す。その後、保育士と E 親子は、子どもの発達について話をしていくうちに、母親は、保育士に対して自然と笑顔を見せるようになった。

## 【考察4】

受付は、子育て支援に来た際、最初に保育士と親子がコミュニケーションを取る場所で、緊張している親子の気持ちを和らげる場でもある。特に初めて来た親子や、まだ数回しか来ていない親子は、知らない人ばかりで不安や戸惑いがとても大きい。受付で、保育士が無言でいると、圧迫感があり母親は、なおさら緊張してしまう。しかし、初めに受付で保育士が、「はじめまして。楽しんでいってくださいね。」等ひとことでも話し掛けを行うことで、保護者は、「子育て支援にくるのは初めてだけど、受け入れてくれるんだ」と感じ、C 親子は安心して子育て支援に参加することができたのだと思う。又、子育て支援中にも、保育士が C 親子に言葉を掛けたことで、「先生は、初めてきた私たちのことも気にかけてくれたんだ。」と感ずることができたと思う。

この日の子育て支援後のカンファレンスでは、自分のことを話さずに、相手のことを聞こうとするのは失礼で、相手も身構えてしまう場合があるので、初めての親子に名前を教えていただく時は、「保育士の〇〇です。」と自分の名前を言ってから、相手の名前を聞くようにした方がよいと指導して頂いた。

子育て支援でも、最初の保育士の印象や雰囲気、気遣いなど細かい部分を大切に、そこから親子との信頼関係を築いていくことが大切だと感じた。

## ◆《地域資源との連携の必要性》事例5『ファーストブック』

金沢子育て支援センター連絡協議会で6ヶ園に指定されている I 幼稚園の子育て支援サークルでは、金沢市での子育て支援活動の1つである「ファーストブック」の紹介にも力を入れている。ファーストブックとは、「絵本を通して親と子の絆を作る」を目的とし、金沢市が無料で本を一冊、親子に提供する子育て支援事業である。金沢市立図書館で開催されるファーストブックの集まり会も、I 幼稚園の職員と図書館の司書達が連携を行っている。

## 【考察5】

このファーストブックの集まり会では、ファーストブックの紹介だけではなく、乳児とのスキンシップの方法を、遊びを通して紹介する取り組みもおこなっている。このように、保育園内に留まることなく、さらに専門的な司書を配置している図書館との連携をし、子育て期の親子の関わりの充実を図ることも子育て支援であると学んだ。



『子育て支援広場に参加した時の学生の様子』



(2) メンティー（学生）からメンター（子育て支援担当保育士）へのインタビュー

子育て支援に学生が参加する事で、子育て支援担当者（メンター）には、何らか効果が得られたのかインタビューを通して探っていきたいと思い、各々の子育て支援の場所でインタビュー調査を行った。その結果をまとめたものが以下の通りである。

- ・学生に教えたり、伝えたりすることで、自分自身を振り返ったり、考え直すことが出来た。
- ・子どもにとっては、いろんな人と触れ合うきっかけとなるので良いと感じた。
- ・お母さんにとっては、学生に子育てや子どもの事について教えることによって、「先輩ママ」として子育てに自信を持つきっかけとなるのではないだろうか。
- ・学生が参加することによって、いつもと違う雰囲気生まれ、良い意味で刺激になる。
- ・保育に関する新しい知識（手遊び）などを持ちこんでくれることで、遊びが活気づく。
- ・若い学生には、子どもたちは馴染みやすく、遊びに溶け込みやすくなる。
- ・学生が、積極的に子育て支援に関心をもち、参加してくることは嬉しい。
- ・学生が、講義の中での学びだけでは、子育て支援についての学びが浅いという実態を知らされた。  
現場側からも、もっと子育て支援の実態に関する情報提供を行い、子育て支援を学生に根付かせて行くことの必要性に気付けた。

注】複数回答あり

5. 調査研究に基づく提言

学生が自ら進んで、地域に開かれた子育て支援広場に赴き、そこで自己課題とする「子育て支援」に関わる学びを向上させていく事（過程）は、将来、保育者となる学生にとっては、非常に有用であり、必要不可欠であることが、本調査研究を通して理解できた。「子育て支援」に関わる知識や実践力は、学内（机上）の学びだけでは、到底深めることはできない。よって、今後も実践現場である地域内の子育て支援現場との連携を密にしながら、実践的な学習の機会をさらに広めていきたい。

6. 調査研究の自己評価

本研究を通して、地域内の子育て支援現場は、常に暖かく学生を受け入れ、後進の指導を担ってくれる場所であることを実感した。しかしながら、現場（子育て支援）に出かける前の事前学習が徹底されていなかった。今後はこの点を改善した上で、本調査研究のプログラムを改良していく予定である。